長岡市内遺跡発掘調査報告書

市立総合博物館建設予定地
妙　見　館　跡

1994

長岡市教育委員会

序

長岡市内には、重要文化財の「火焔土器」を出土した馬高・三十稲場遺跡や、玉作りの藤橋遺跡など国史跡の縄文時代集落跡をはじめ、200カ所以上の遺跡が所在しています。遺構や規模などが目に見えて判断できる遺跡の種類は、古墳や塚それに山城跡など数が限られています。集落跡など範囲が不明な遺跡が多いため、開発計画と埋蔵文化財の保護との調整に支障を来すおそれがあります。

このため、長岡市教育委員会では昭和62年度から国及び県の補助金を受けて、遺跡の規模など遺跡の内容を把握する事業に取り組み、各種開発と埋蔵文化財保護の調整に資する資料の整備に努めてきました。

平成５年度は、御山町地内の長岡市立総合博物館（仮称）建設予定地と、農業集落排水工事計画に伴って妙見館跡の２カ所を調査しました。総合博物館建設予定地は、未周知の遺跡が存在する可能性が高いため、確認調査を行いました。

調査にあたり、文化庁及び新潟県教育委員会をはじめ、関係各位から御指導・御協力を賜りました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成６年３月

長岡市教育委員会

教育長　大西厚生

例　言

1　本書は平成５年度の国・県の補助金の交付を受けて実施した「長岡市内遺跡発掘調査」の記録である。

2　調査は長岡市教育委員会が主体となって、平成５年９月から10月にかけて実施した。

3　本書は、それぞれの調査担当者が分担して執筆・作成し、駒形が全体をまとめた。

目　次

1　総合博物館建設予定地……1

2　妙見館跡……6

3　おわりに……11

調査体制……11

調査に御指導・御協力をいただいた方々……11

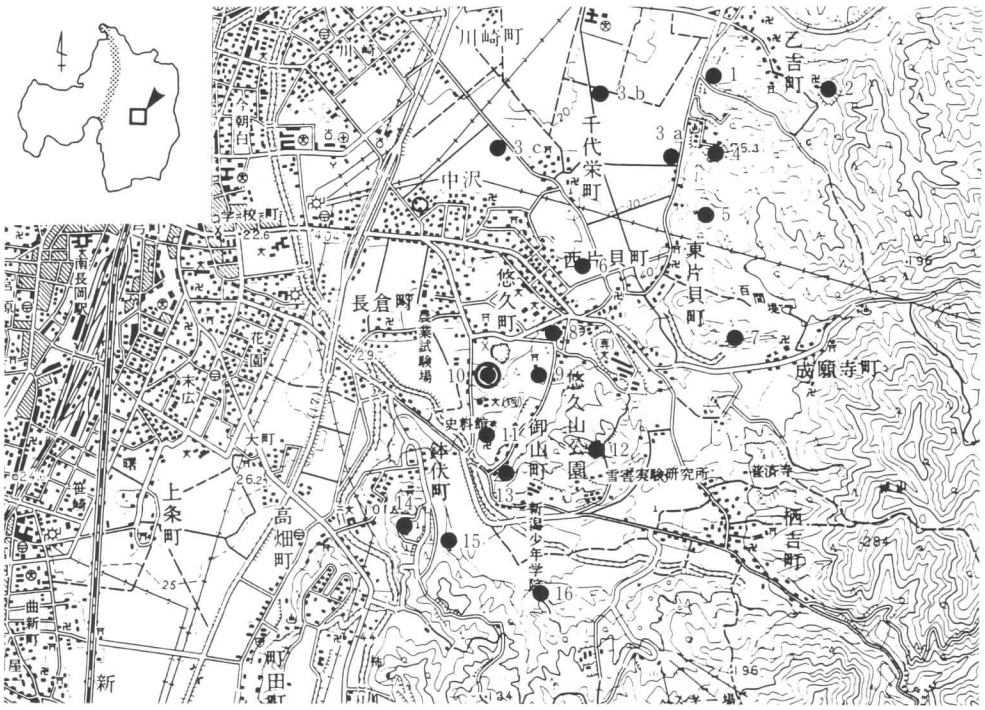
1　市立総合博物館建設予定地

所在地　　長岡市悠久町・御山町地内ほか

立　地（第１図）　　長岡市東部の山地（東山丘陵）沿いに位置し、悠久山公園地内の北西部にあたる。標高は約36～46m。範囲の北側は蒼柴神社の参道、南側は長岡短期大学敷地、東側は郷土史料館に続く遊歩道、西側は市道東幹線38号線に接する。範囲内には数軒の住宅があったが、現在は移転している。現況は旧畑地および山林で、東半部は緩く傾斜し、西半部はほぼ平坦な地形を呈する（写真１・２）。

悠久山公園内およびその周辺には、周知の堅正寺遺跡（縄文晩期、弥生中・後期）、蒼柴神社裏遺跡（弥生中期）、前山遺跡（弥生中・後期）、大沢遺跡（平安、中世）、戸左エ門遺跡（縄文後期、弥生中期、平安）などがある。特に弥生時代に関連した遺跡が多い。

調査に至るまで　　調査地（第２図）は、新長岡発展計画によって、市立総合博物館（仮称）建設予定地（長岡地域土地開発公社所管）に選定されている。地形からみて、敷地内に遺跡の存在する可能性も予測されることから、平成５年度に長岡市教育委員会が、遺跡の有無および範囲を確認するための試掘調査を実施することになった。敷地面積は旧畑・山林等をあわせて、約30,000㎡である。なお、敷地内南東部の急傾斜の山林については博物館建設によ



第１図　調査地の位置と周辺の遺跡（１/50,000、弥生時代・古代関係の主な遺跡）

１．岩村窯跡，２．堂ヶ峯，３ａ～ｃ．千代栄，４．間野窯跡，５．東片貝Ⅱ，６．西片貝，７．百間堤，８．戸左エ門，９．蒼柴神社裏，**10．市立博物館建設予定地**，11．堅正寺，12．前山，13．大沢，14．鉢ヶ峰，15．行塚，16．松葉

る改変の予定がないこと、また南西側のグランド整地部分については大規模な盛土が行われており調査が困難なことから、対象範囲から除外した。

調　査　調査は、平成５年９月27日～10月６日までの期間（７日間）実施した。事前に必要な調査機材を搬入、９月27日から発掘区（トレンチ）を設定し、発掘作業を開始した。

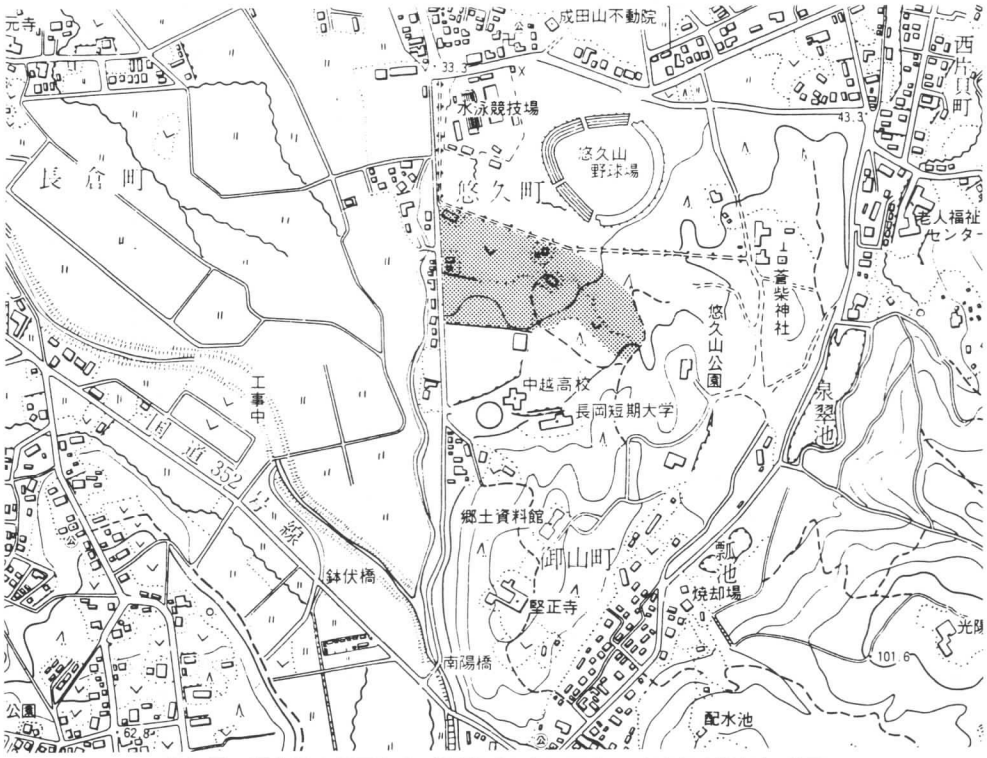
調査区は中央付近の沢を目安に、便宜的に西地区と東区に大別し、それぞれの範囲内に地形に応じて約10～20mの間隔で発掘区を設定することにした。各発掘区は２×４mの小トレンチである（ただし、32Tのみ３×４m）。発掘作業（写真３）は、西地区・東地区を並行して進めた。各トレンチごとに、地山面まで掘り下げ、遺構の有無、遺物の出土状況、堆積土層などを確認し、写真撮影等の記録後、順次埋め戻し作業（写真４）を行った。10月６日には埋め戻し作業を完了し、同日機材を撤収して調査を終了した。

調査の結果（第３図）　調査区全体に設定したトレンチは計58か所である。そのうち、東地区の３か所のトレンチで遺物が出土したが、遺物に関連した住居跡・土坑等の明確な遺構は検出されなかった。以下、土層序と地区別の概要をまとめる。

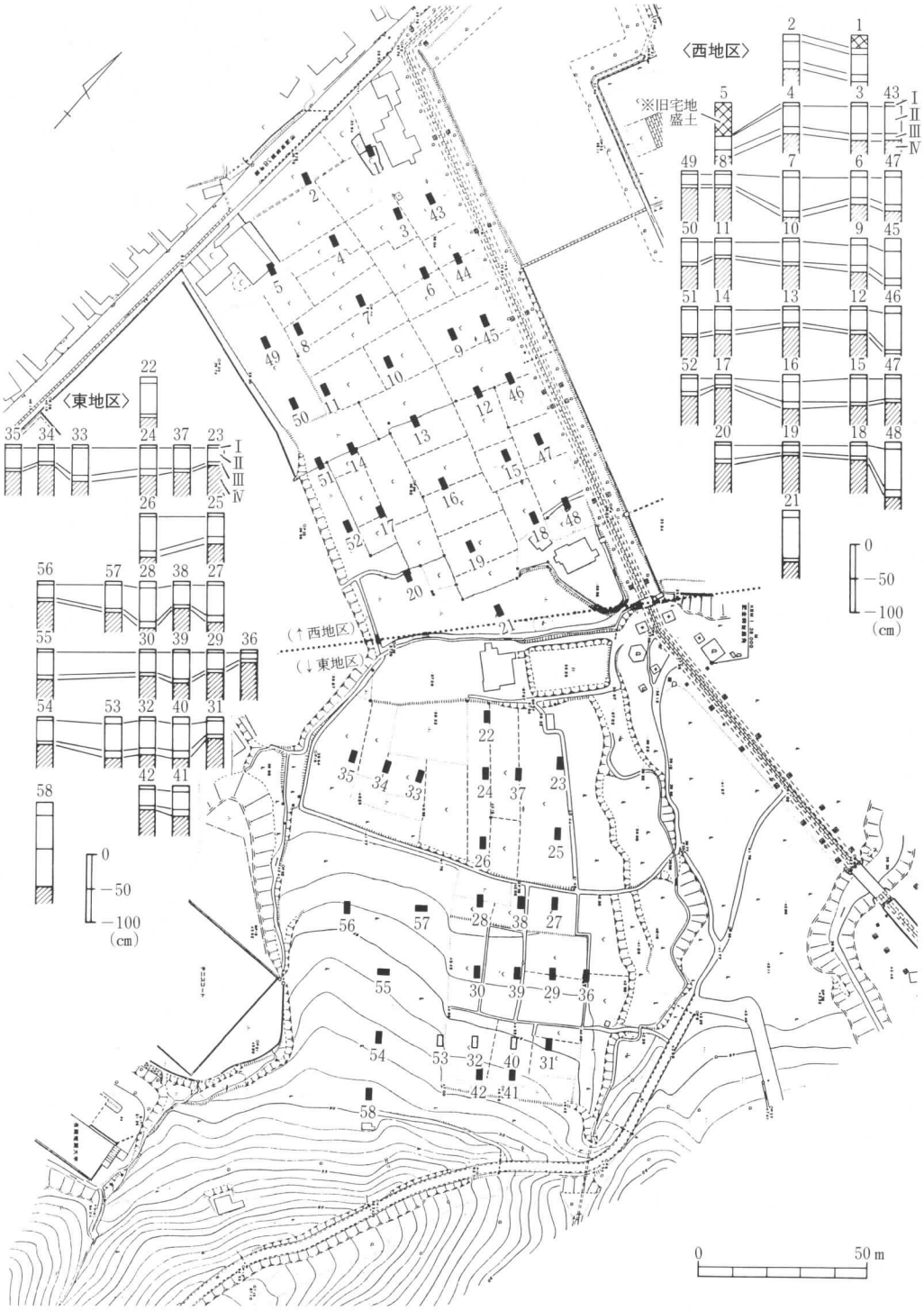
土層序　確認された基本的な堆積層序は、次のとおりである。

Ⅰ層＝表土（黒褐色土、旧畑の耕作土または山林部表面の腐食土）

Ⅱ層＝黒褐色土（全般的に粒子細かく礫の混入は少ない。粘性弱い。地点により色調の濃淡



第２図　調査地の範囲および地形（１/10,000）　網点部は調査地の範囲



第3図　発掘区の設定および土層（1/2,000）

アラビア数字はトレンチの番号を示す。□＝遺物出土のトレンチ、■＝遺物が出土しなかったトレンチ

や層厚は若干異なる。東地区の一部で遺物を包含する。）

Ⅲ層＝暗褐色土（地山粒がやや混在する漸移層、層厚は地点によりやや異なる。）

Ⅳ層＝黄（赤）褐色土（地山、粘性やや強い。西地区で赤褐色・東地区で黄褐色気味の色調を呈する。）

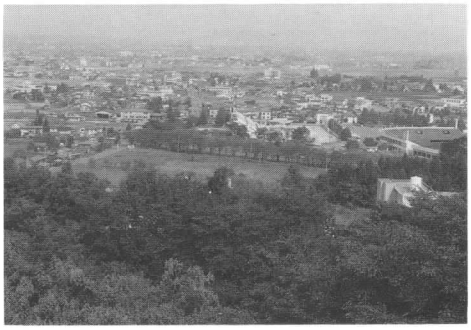
西地区　31か所のトレンチを発掘したが、遺構や遺物の出土は全く認められなかった。土層の堆積は北側で安定し、黒褐色土が顕著で層厚50～60㎝の地点もある。著しい撹乱は特にみられなかった。一方、南側では堆積が薄い状況を示していた。また、旧宅地があった箇所には、盛土による整地が行われていた。なお、21T付近には、東西方向の小規模な沢が入っており、現在の地表面から－80㎝程度で湧水が認められた。地山はやや砂質気味の暗黄褐色土で、Ⅱ層中には沢埋土とみられる黄褐色土のブロックが混入している。

東地区　27か所のトレンチを発掘。ほぼ全域にわたって、安定した黒褐色土が広がり、耕作等による著しい撹乱はみられない。32T、40T、53Tの、相互に近接する3か所でのみ遺物が少量出土し、その他のトレンチからは全く出土しなかった。なお、32Tなどの一部のトレンチに、地山面に黒褐色の落ち込みが認められたが、掘り込んだ形跡は明瞭でなく、遺物に関連した遺構とは認定し難い。

3か所のトレンチから出土した遺物は、いずれもⅡ層の中部から下部に包含されていた。その内訳は、32T（土器破片3点）、53T（土器破片2点・陶器破片1点）、40T（土器破片4点）である（写真8）。土器破片は弥生土器と考えられるもので、概ね明黄褐色の色調（1点のみ炭化物の吸着により器外面黒色）を呈し、1㎜以下の砂細粒を多く含む。また部分的にケズリ、ミガキ、ハケ目などの調整が認められる。多くは細片のため、器形等の詳細は不明であるが、53T出土の1点は薄手のつくりで高坏の口縁あるいは脚の端部破片とみられ、もう1点には器外面に斜位の撚糸文が施されている。それらの胎土や色調は、全般的に御山町前山遺跡出土の弥生土器［『長岡市史』資料編1考古 1992年］に類似する。また、53Tの陶器破片は、器外面黒灰色・内面淡灰色を呈し、胎土は緻密である。底部の破片で、底面には高台が巡る。須恵器の長頸壺と考えられよう。

まとめ　遺物の出土状況から新遺跡と認定されるが、土層の堆積が良好にもかかわらず、遺跡としての広がりは不明瞭であった。遺物は調査区全体の東端部にあたる3か所のトレンチで出土したが、細かい土器破片で出土量もわずかなため、遺跡の性格や時期の詳細は明かでない。現段階では、調査区東端部で、遺物の出土したトレンチを中心に小規模に広がる弥生時代および古代（奈良または平安時代）の集落跡と認識しておきたい。弥生時代では、周辺に分布するいくつかの遺跡との関連がうかがわれる。

今後、博物館の建設に際して、東端部の地形改変が行われる場合には、当該地点の再調査が必要と考えられる。

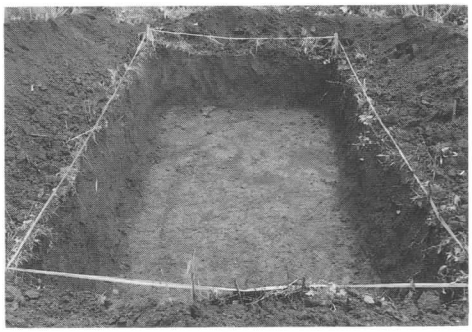


1　調査地遠景（南側から）

2　調査地近景（西側から）

3　発掘作業（40T、北東から）

4　埋め戻し作業（48T、西側から）



5　西地区46T完掘状況（西側から）

6　東地区53T完掘状況（西側から）

7　東地区53T遺物出土状況（西側から）

8　出土遺物（53T・40T出土）

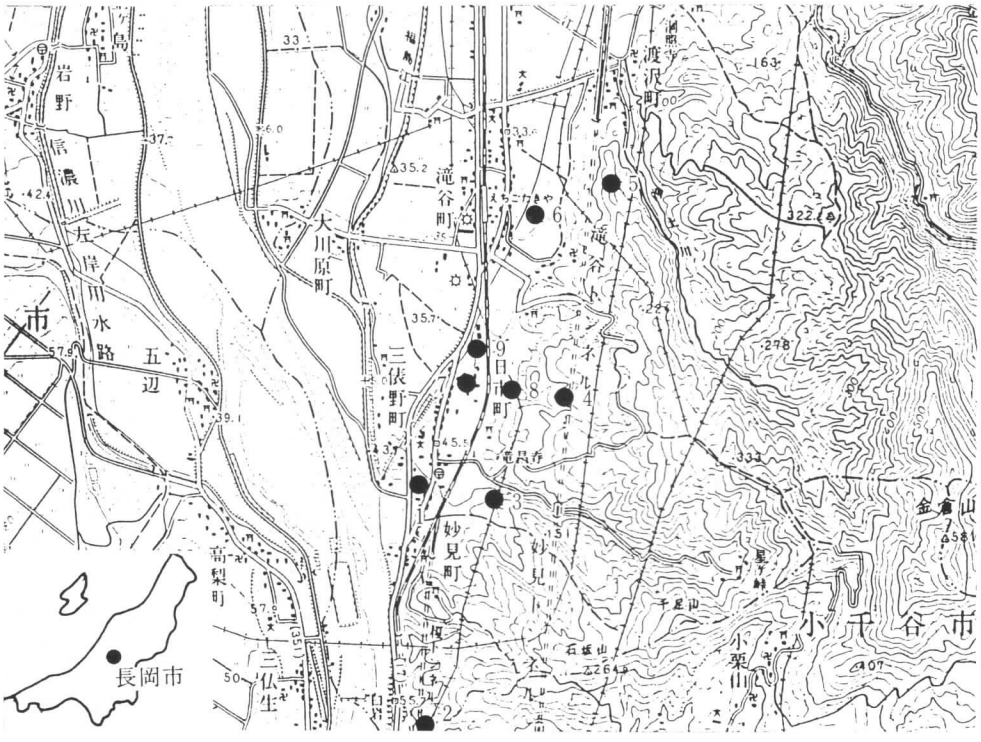
2　妙見館跡

所在地　　長岡市妙見町字浄土原

立　地（第４図）　　長岡市の南部で、標高約44～46ｍを測る信濃川右岸の河岸段丘上に立地する。この付近は、東側の山地（東山丘陵）が信濃川に迫り、袋の口が絞られる地形を呈している。館跡を区画する北堀の一部が地形上に現れていることなどから、館跡の範囲は国道17号線から東側の畑地及び住宅地にかけて広がっていると推察される（第６図）。

妙見館跡は、地元では南北朝時代から室町時代にかけて、付近一帯を領有していた石坂氏の居館跡と伝えられている。付近の尾根上には、根小屋である妙見館跡の山城と考えられている会水城跡（第４図２）をはじめ、中潟城跡（３）、六日市城跡（４）、蛇山城跡（５）が並び、東山の山裾には中世集落跡の三百刈ａ・ｂ・ｃ遺跡（７～９）及び中世の渡来銭を出土した下ノ坪遺跡（６）などが点在している。

調査に至るまで　　国道17号線の拡幅計画地に妙見館跡の一部が含まれている、との通報が長岡市教育委員会にあり、新潟県教育庁文化行政課に連絡を取り、平成４年７月27日に建設省長岡国道工事事務所と文化行政課及び長岡市教育委員会とで現地確認を行い、秋に文化行政課が確認調査を実施することになった。そして、確認調査の結果、平成５年春に（財）新



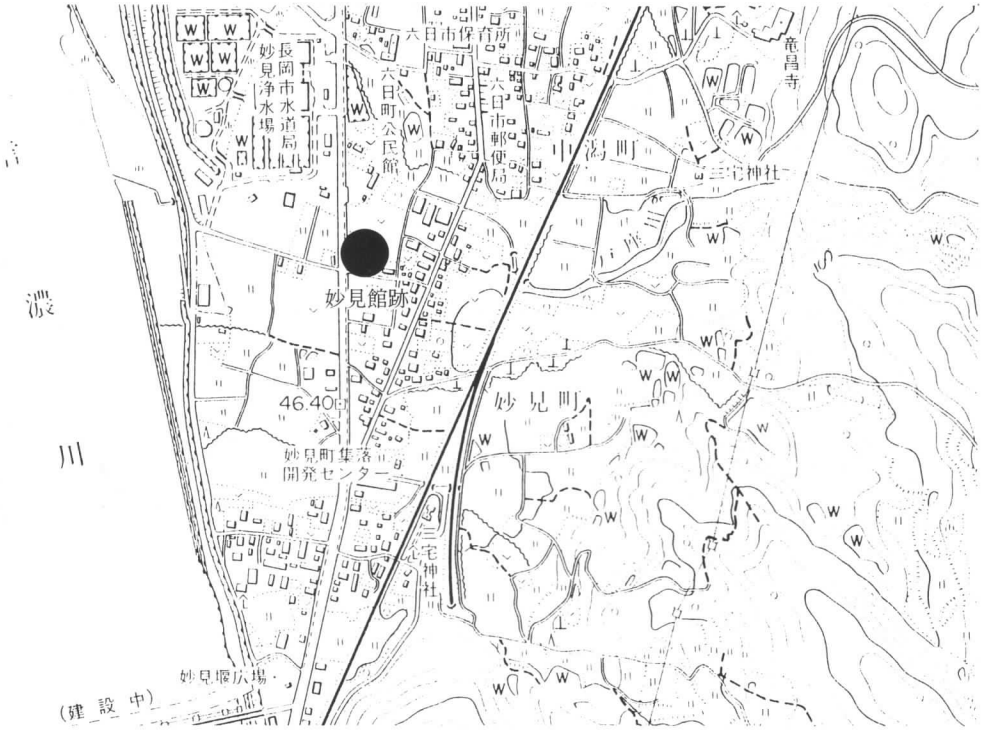
第４図　遺跡位置図（1/50,000：長岡）

潟県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」という）が国道拡幅部分の発掘調査を行い、南北の堀と建物跡数棟、井戸跡などを調査した。

この国道拡幅工事に関連して、妙見地内で農業集落排水施設工事が長岡市の事業として、事業団が調査した妙見館跡の東側に計画された。このため、工事主管課（農林部農林整備課）と協議を行い、工事前に長岡市教育委員会が発掘調査を行うことにした。

調　査（10月４日～７日）　　発掘調査は、事業団が調査した南堀の延長と、館の東を区画する堀を検出することを主目的に実施した。調査トレンチは、農業集落排水施設の計画幅１ｍを対象に、東堀が検出されるまでトレンチを延長することにした。この結果、トレンチは国道17号線の拡幅計画地を西端に、現生活施設のために発掘できない２ｍを除いて、東へ19ｍ（Ａトレンチ）と24ｍ（Ｂトレンチ）の２本設定した。調査の手順は、始めに道路敷き舗装のアスファルトと、路盤の砂礫層をバックフォーで除去し、その下の土砂を人力で基盤層まで掘り下げて、堀遺構の確認を行った。本調査対象地は、生活道路として供用されているため、調査後は直ちに埋め戻した。

調査の結果　　館跡の南側で、事業団が調査した堀の延長と、東側の堀が検出された。だが、遺物は１点も出土しなかった。トレンチの北側は水道埋設管の掘り形がおよんでおり、遺構の検出はできなかった（第７図上）。



第５図　調査地周辺の地形図（１/10,000）

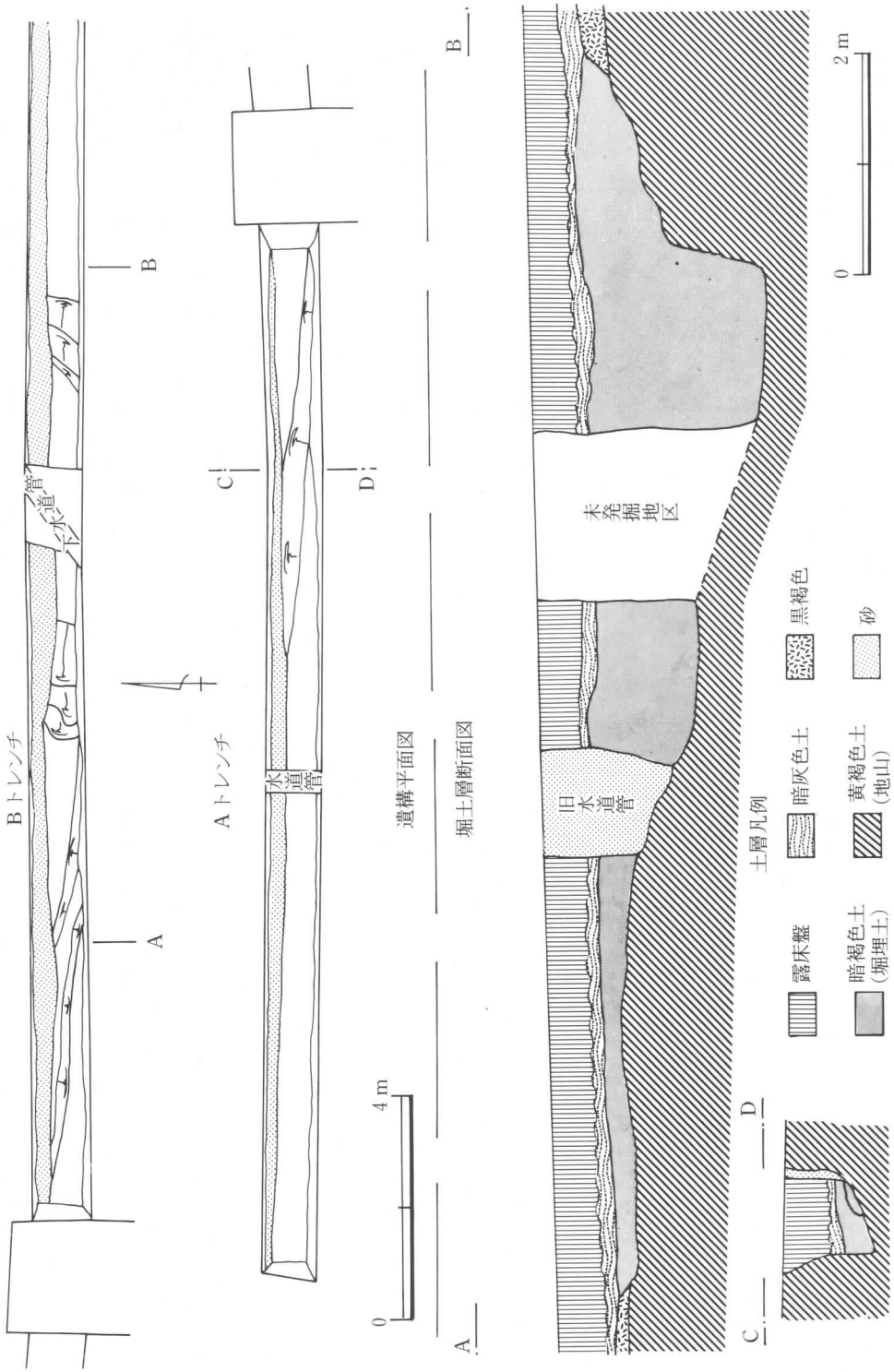
土層序（第７図）　生活道路のため、道路の路床盤（舗装のアスファルト・路盤の砂礫層）が遺跡の基本土層の上に被り、その下に旧表土と思われる暗灰色土、黒褐色土そして地山の黄褐色土に続いている。

遺構（第７図）　事業団調査で確認された南堀の延長がＡトレンチで検出された。Ａトレンチ内の南堀は、南へ傾斜しており、館側の立ち上がり部分と思われる。Ｂトレンチでは南堀に入り込むように幅40㎝、深さ20㎝の溝が検出されたが、直接的に館跡に関係する遺構であるかの確認はできなかった。

東堀は、旧水道管や下水道管のために詳細は不明であるが、調査からは天端幅約7.50m、底面幅約４m、旧表土からの深さ約1.60mの規模で、館側の立ち上がりは緩い階段状、館の外側の立ち上がりが緩い２段の傾斜からほぼ垂直に掘り込む箱形を呈することが推測される。また、堀の平面が両側－特に外側の下段が東に開くようになっており、堀の南東隅に当たっている可能性が高い。

まとめ　今次調査は、幅１mの調査であったが、館の東堀が確認され、事業団調査の成果と合わせて石坂氏の居館と伝えられている妙見館の一部が明らかにされた。今後は、西堀を確認できる機会を待ち、妙見館の四囲を確認し、妙見館の全容を明らかにしていきたい。

第６図　妙見館跡調査トレンチ図（1/1,000）

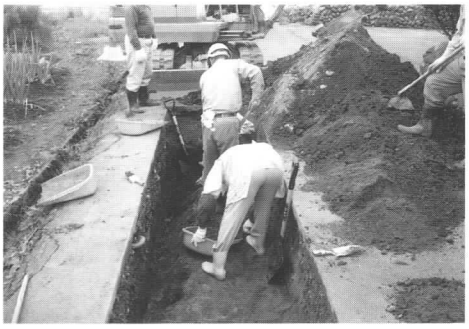


第７図　遺構平面及び土層断面図

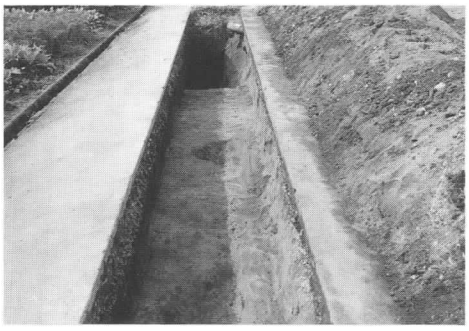
調査地区近景（東から）

発掘調査風景

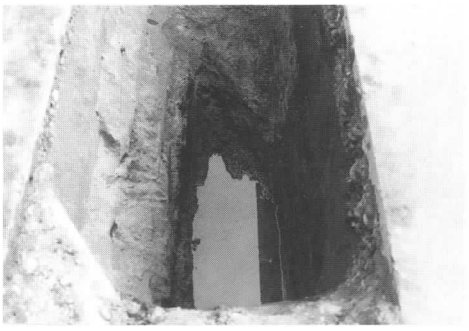
発掘調査風景



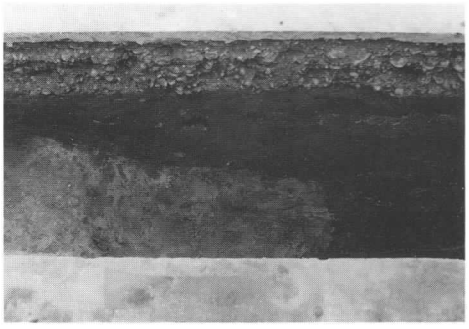
発掘調査風景



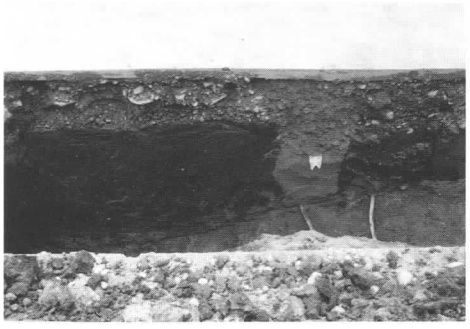
Bトレンチ完掘状況（東から）



堀・東側立ち上り



堀・東側土層断面



堀・西側土層断面

3　おわりに

今年度の調査は、長岡市立総合博物館（仮称）建設予定地と、妙見館跡を対象に行った。総合博物館建設予定地の調査では、建設予定地の東端部で弥生時代の土器が数点出土したが、遺跡の広がりや性格の詳細を確認するためには、さらに試掘調査を行う必要が出てきた。今後、博物館の建設計画と合わせて試掘調査を行って明らかにしていきたい。

妙見館跡の調査は、事業団調査の南堀の延長と、東堀が検出され、事業団調査の成果と合わせて、館の内容の一部が明らかになった。

今後も開発計画と埋蔵文化財保護との調整協議に提供できる資料の整備を行い、埋蔵文化財の保護に遺漏の無いように努めたい。

調　査　体　制

調査主体者　　長岡市教育委員会（教育長　大西厚生）
調査担当者　　小熊博史（市立科学博物館、市立総合博物館建設予定地）
〃　　駒形敏朗（社会教育課、妙見館跡）
調査事務局　　社会教育課（課長　松井登喜男副参事）
調査作業員　　地元有志

調査に御指導・御協力をいただいた方々

小田由美子　水沢美徳

長岡市内遺跡発掘調査報告書
市立総合博物館建設予定地・妙見館跡
平成６年３月30日印刷　　平成６年３月31日発行
発　行：長岡市教育委員会